覚症状も軽快した．経口摂取も7日目から開始し，以後腹痛なく退院した．血栓症が起こり得る基礎疾患を持った症例の腹痛は本疾患を常に念頭において加療するべきと考えられた．

36）虫垂炎は気圧に影響を受けるか

福田　稔・川島　吉人（県立坂町病院外科）

平成3年2月より平成4年8月迄，虫垂炎の発生時期と気圧の関係を調べてみた．

虫垂炎は気圧が 1,020 mb 以下に多く発生している事が明らかになった．又同時にイレウスや十二指腸潰瘍穿孔も同様である事が分かった．

又四季を通じて虫垂炎の発生に変化があるか否かを調べて発表する．

37）当科における腹腔鏡下手術の現況 —胆摘を除く—

川合　千尋・内田　克之（日本歯科大学新潟歯学部外科）
鈴木　茂・吉田　奎介（日本歯科大学新潟歯学部外科）
富山　武美（新潟大学第一外科）
植木　秀功（亀田第一病院外科）

当科では1991年10月1日より腹腔鏡下胆嚢摘出術を開始し，その後，手技の安定と共に胆摘以外にも腹腔鏡下手術の適応を拡大している．現在までの腹腔鏡下手術症例は66例であり，胆嚢摘出術以外の手術の内下記4術式につき報告する．① 胆嚢摘出術＋経胆嚢管的総胆管結石摘出術：胆嚢管をバルーンカテーテルで拡張の後，細径胆道鏡を挿入．バスケットカテーテルで結石を摘出．胆嚢管は通常通りクリッピングした．② 虫垂切除術：3本のトロッカーで入り，虫垂間膜および虫垂根部を endo-GIA で処理し虫垂を摘出した．③ 鼠径ヘルニア修復術：Prolene mesh を用いヘルニア門を腹腔側から閉鎖した（preperitoneal mesh repair）．④ 胃粘膜下腫瘍摘出術：腹腔鏡と胃内視鏡で腫瘍の位置を確認．腫瘍直上で小開腹し摘出した．

その他腹腔鏡下手術は様々な手術に適応可能であり，今後さらに症例を積み重ね適応を広げていきたいと考えている．

38）腹部外傷手術例の検討

齊藤　六温・二瓶　幸栄
吉田　正弘・関矢　忠愛（刈羽郡総合病院外科）
植木　光衛

過去8年間に開腹手術を行った外傷例は，男21例，女5例の計26例であり，年令は19才から89才（平均47.7才）であった．外傷の原因は交通事故16例（運転中11例）労災5例，鈍的暴力2例，刺創3例（自傷2例）であり，交通事故の2例，労災の1例，刺創の1例の計4例が死亡した．

年令分布では交通事故運転中で20才代と60才代が多かった．

初診時100％に腹痛を認めたが，初診時のショック状態は，腹膜炎12.5％，出血30.0％であり，腹膜炎＋出血が83.3％と高値であった．

入院から手術迄の時間をみると腹膜炎では外科初診と他科初診で明らかに前者が短時間であったが，出血では，有意差はなかった．この事は，重症外傷例では1科の医師が診ているだけでは見落しがあるので，可能な限り複数の専門医が診察する必要がある事が明確になった．他に入院期間，予後，死亡例，ならびに興味深い症例を発表する．

39）当院における虚血性心疾患の消化器外科手術の検討

橋本　恭伸・近藤　恒徳
山洞　典正・植木　秀任（立川総合病院外科）
田中　乙雄（新潟大学第一外科）

1987年1月から1991年12月までの過去5年間に，当院で施行された全麻下消化器手術症例958例のうち虚血性心疾患66例（陳旧性心筋梗塞31例，狭心症35例）における消化器外科手術上の問題点を検討した．悪性疾患は52例，このうち手術死亡，入院死亡は8例（15％）と高率であった．これらの背景因子として（1）比較的高齢の症例（2）術前心機能が低下している症例（3）心筋梗塞症例とくに発症後6カ月以内の症例における死亡率が高率であった．また手術に際しては，術前心機能の評価に加え（1）術中出血量の抑制（2）術後の充分な補液による hypovolemia の防止が必要とおもわれた．